

佐賀新聞 2010(平成22)年1月16日(土) 県内文化欄 連載「近代との遭遇 世界を見る・日本を創る」

22年)1月16日(土曜日) 佐賀新聞 (第三種郵便物認可)

スポット SPOT

## 近代との遭遇

世界を見る・日本を創る

### 万博に刺激を受けた使節団



イラストレイテッド・ロンドンニュースが挿絵入りで掲載した「ウィーン万国博覧会日本庭園作庭之図」=佐野常民記念館蔵

# 福澤諭吉らを圧倒

会場は一瞬でよめぎ、いっせいに彼らに「まなきし」を向けた。

1862(文久2)年、駐日英国公使オールコックの勧めで幕府から派遣された竹内遣欧使節団(正使竹内下野守安徳以下38人は、5月1日の第2回ロンドン万国博覧会の開会式に臨席した。豪華絢爛な服装に身を包む欧州人の中で、「みすほらしいことすらいえぬ」(イラストレイテッド・ロンドンニュース 質素な羽織・袴の一行は、高い評価を受けた)。

この一行の中に、若き日の福澤諭吉、後に外務卿となる松本弘安(寺島宗則)、東京日日新聞社長となる福地源一郎がいた。福澤は、壮大な規模の博覧会に圧倒され、「欧羅巴(ヨーロッパ)を羨すべからず」

この後、1867(慶応3)年の第2回パリ万博には、幕府・薩摩藩・佐賀藩が出品し、73年のウィーン万博には、明治政府が正式に参加した。ウィーン万博では、会場内に神社と日本庭園を組み合わせたパビリオンを建設したが、イラストレイテッド・ロンドンニュースでは、その建設風景が挿絵入りで紹介された。日本はその後の万博でも、引き続き日本趣味的なパビリオンを建設するなど、欧米人のジャポニスム(日本趣味)を刺激するかたちで、

「博覧会の時代」

一方、ウィーン万博の事務局副総裁を務めた佐野常民は、西洋技術・学術の摂取や「日本」の売り込みとともに、国内における博覧会開催・博物館建設の準備を万博参加の目的としてあげている。同万博を視察した岩倉使節団の副使大久保利通は、明治6年政変(1873年)後、参議・内務卿として政権を握り、イギリスをモデルとして諸制度の整備を進めるとともに、本格的な博覧会開催を建議した。果たして1877(明治10)年、東京上野で第1回万国勸業博覧会が開催され、日本も本格的な「博覧会の時代」に入った。この



福澤諭吉写真(竹内遣欧使節団の際にロシア・サンクトペテルブルクで撮影) 外務省外交史料館蔵

## 消費文化と結びつく

後、日本は博覧会を軸に開化・殖産興業に努め、時代が下るにつれて博覧会は消費文化と深く結びつきながら開催されていく。

とくに、1851(嘉永4)年のロンドン万博以降、各国で開催された万博は次第に植民地主義が前面に出てくる。エッフェル塔をモニュメントとした89(明治22)年のパリ万博では植民地先住民の展示が行われ、それ以降「人間の展示」が常態化していった。

万博を通して「帝国主義的まなきし」を学んできた日本は、1903(同36)年の第5回万国勸業博覧会の際の場外パビリオン「学術人類館」をはじめとして同様の展示を実施していった。

「近代との遭遇」の中にあった19世紀の日本・日本人は、「近代」＝「西洋」から正も負も合わせて急速に吸収していった。(県立博物館・美術館学芸員 浦川和也)

佐賀城本丸歴史館の開館5周年を記念した特別展「近代との遭遇」は2月14日まで県立美術館で開催。1月25日、2月8日は休館。観覧料は一般1000円、大学生800円、高校生以下と障害者は無料。問い合わせは佐賀新聞社事業部、電話0952(28)2151へ。

県内文化